婦人の目

平和のために働く

藤屋紀子

寝すごした私があわてて台所でバタバタやっているのに気付いた長女は、私の横に立って無造作に手伝い始めた。イライラの爆発をおさえかねていた私は、長女の一つひとつの動作にがまんできず「あなたは自分の仕事をできてないのに、なぜここに来るの。お母さんには、お母さんの手順があるから自分のことをしなさい」と大声で言ってしまった。

私の態度ひとつで、家庭のふん囲気を決定することができ、ひいてはその日一日の主人や子どもの態度まで決定してしまうことがよくある。

車の事故が発生しやすい時刻は、他のどんな時間よりも朝だということを聞いたことがある。この原因は、世の夫たちがムシャクシャした気分で家を出て、そのイライラをハンドルに八つ当たりすることによって晴らそう、とするからだそうである。

この日私がバラまいたイライラの病原菌は、主人の「お母さんは今忙しそうだから、何をしたらいいか聞いてから手伝いなさい」と言ったひと言で、家族に伝染せずに済んだ。

たとえそれが私の目には邪魔な行為であったにしても、それらの背後にあるものを見ぬき、長女の気持ちを受け入れなかった自分がとても恥ずかしかった。

しばしば愛は感情であると考えがちであるけれど、それはまず第一に、生きる道として自覚したい。つまり、気持ちよりも自らをゆだねることに、もっと関心をもちたい。

私もキリストの生命にあずかろうとするのなら、彼の愛の器であろうとするのなら、愛を表わそうとするお互いの努力に対して、親切に心を開くことを学びたい。福音のよき訪れとは、葛（かっ）藤をさける方法が私たちに与えられたということではなくて、葛藤に対して、愛の力が私たちに与えられているということではないかと思う。

家庭の平和のために働く主婦の役割には、はかりしれないものがあるような気がする。

（主婦）

1981 5/31